

○道江砂恵子 後藤綾子 飯塚幸子

(実践女子大学)

【目的】 日焼けによる皮膚色の変化に関する研究には、紫外線感受性やサンスクリーン剤塗布の有無による皮膚色の違い、あるいは日焼け後の皮膚色の回復を観察などがある。本研究では、長時間屋外にて活動を行う者と主に室内にて行動する者において、紫外線曝露量と皮膚色の変化の違いについて検討を行った。

【実験方法】 実験は、1997年5月～9月に行った。被験者は、19～23歳の女子大学生25名を対象とし、月に1～2回程度海岸にて活動する学生(Oグループ)15名と屋外にて長時間の活動は行わない学生(Iグループ)10名の2群に分類した。測定項目は、紫外線強度、紫外線曝露量および皮膚色とした。皮膚色は前額、頬、手背、足背、肩、背、胸の7部位を毎月1回測定した。紫外線曝露量の測定は、Oグループは海岸での活動時において、またIグループは毎月の連続する3日間に行った。

【結果】 実施期間における紫外線曝露量は、Oグループが $500 \sim 900 \text{kJ/m}^2/\text{day}$ 、Iグループは $20 \sim 40 \text{kJ/m}^2/\text{day}$ であった。皮膚色に関しては、胸を基準とする部位別の変化は、どの部位においてもIグループよりOグループの変化量の方が大きく、この差は月が進むにつれて広がる傾向を示した。特に彩度に関しては、すべての部位において有意($p < 0.05$)な差が見られた。